

九十九里 新創世記

The 100th anniversary magazine

「海の楽しみ
海のもてなし」

片貝海水浴場無料休憩所 100周年記念誌

九十九里町海水浴場の歴史	
明治43（1910）年	片貝海水浴場に向上会の手により無料休憩所が設立
明治44（1911）年	観光パンフレット「九十九里 其の一」を発行
明治45（1912）年	片貝海水浴場が隆盛になり、「九十九里 其の二」を発行 県が「海水浴規則」を發布
大正6（1917）年	徳富蘆花（小説家）が、豊海村の粟生海岸で一カ月避暑生活を送る
大正7（1918）年	徳富蘆花、小説「新春」を発行し、九十九里での避暑生活を描き、全国的にも町内の海水浴場が知られる
大正10（1921）年	県が「海水浴開放規則」を発布 無料休憩所の設備が充実される
大正12（1923）年	海水浴場倶楽部を組織 貸家・貸間組合が設立される
大正15（1926）年	東金・片貝間（8キロ）を結ぶ「軌道」が運行される
昭和8（1933）年	片貝観光協会に改称される
昭和10（1935）年	町勢一覧「海の片貝」を発行
昭和35（1960）年	九十九里町として初の海水浴場開きが行われる
昭和36（1961）年	空前の海水浴ブームが訪れる（海水浴客休憩所や浜茶屋が浜をにぎわす）
昭和39（1964）年	「九十九里音頭」を発表 民宿が続々と開業される
昭和47（1972）年	九十九里波乗り道路開通
昭和60（1985）年	不動堂海岸にシンボルタワーが完成
平成2（1990）年	九十九里町ふるさとまつり開催
平成6（1994）年	記録的猛暑により海水浴場客数県内トップ（123万6千人）
平成10（1998）年	東金・九十九里有料道路開通
平成22（2010）年	片貝海水浴場無料休憩所開設100周年記念展開催

海とともに
育まれてきた文化が
この地にはあります

時代が移り変わっても
今日に至るまで
この地に根付いた文化は
決して変わらない

100年前の話
この地域の観光発展のために
奮闘した人たちがいました

海水浴を通して
九十九里町が歩んできた道のり
先人たちの情熱と惜しげもない努力を
振り返る

現在を生きるわたしたちが
新たな100年目の物語を
創造していくために……

片貝海水浴場無料休憩所100周年記念

海の楽しみ 海のもてなし

（行發部眞寫西中貝片）

（NO.4）

所憩休料無會上向場浴水海貝片（里九十九）

（中西月華制作絵はがき／片貝海水浴場無料休憩所開設式）

海とともに

わたしたちが産声をあげたときから
そこには海があった
やがて海は人を呼び
浜は活気でにぎわいに満ちていた

美しい海と浜。大きな弓
なりの海岸線のほぼ中
央に白砂青松の自然豊
かな風景が広がる。わたしたち
のふるさと九十九里町の姿がそ
こにあります。

黒潮が育む、大自然の恩恵を
受け、昔から好漁場でもあり、
沖合いには、イワシの群れが回
遊し、江戸時代には、地曳き網

を使った漁法で漁獲量は、日本
一といわれるほどでした。イワ
シはわたしたちの生活において、
あらゆるものをもたらしてくれ
ました。この背景からもわかる
ように、かつて、人々にとって
海は生活の場でした。

漁師などは、生活のために海
に入ると、同時に、神に祈りを
捧げる、汚れを払うなど、海は

とても神聖な場でもありました。
しかし、明治時代に入ると西
洋文化などの影響もあり、日本
にも医療的効果のため、塩湯治
などと呼ばれ、「風邪をひかない
ため」「肌を強くする」を目的と
しての海水浴が行われました。
それは、明治18（1885）
年のこと、当時の軍医総監の松
本順により、神奈川県の大磯地
区に日本最初の海水浴場が開設
されました。

これ以降、海水浴場は全国的
にも広がり房総半島にも波及、
稲毛海岸などにも開設されるよ
うになりました。こうして交通
機関の発達や避暑行楽の変化に
より、明治43（1910）年に
「新たな文化」の一步目となる片
貝海水浴場無料休憩所が開設さ
れました。

イワシ漁

（明治後期）

古くからイワシ漁で栄えた
九十九里。やさかご一杯
に捕れたイワシは現在でも、
水産業の核となっている。



歴史とともに海水浴の役割は変わるが、雄大な自然は人々を九十九里に惹きつける。

片貝の 海水浴旅館

（明治後期）

海水浴の人気が
高まると、多く
の来遊者が訪れ、
それを受け入れ
るための旅館な
どが営業され、
夏季には一層の
にぎわいをみせ
ていた。



夏

は、町に活気を取り戻
させます。多くの来遊
者がこの浜に来て、笑
顔と思い出を作っていきます。
これも昔と比べても変わらぬ風
景の一つ。

日露戦争（1904年～19
05年）後、世の中は海水浴ブ
ームとなります。

海水浴場への交通網が整いア
クセスが容易になると、治療か
ら遊泳を楽しむという目的へと
「海水浴」の性格も次第に変化
をしていきました。

一部の上流階級の人だけでは
なく、さまざまな社会階層の人
が浜辺での余暇を楽しむよう
になりました。

実にこの時、九十九里という
地域の良さを多くの人に知って
もらい、日本を代表する観光地
に押し上げようと奮闘したのが、

新進気鋭の薬剤師、中西忠吉（以
下、月華（俳号））を中心とした
向上会という、地域の有志が集
まった文化団体でした。

向上会は、ふるさとを愛する
文化人であった月華が、「九十九
里に文化という大輪を咲かせる」
ため、地方文化を外面的に、そ
して文化教養を内面的に発展向
上させ、ふるさとに少しでも貢
献することを目的に明治39（1
906）年に発足しました。

年々増える来遊者を目の当た
りにしながら、月華ら向上会の
メンバーは、満を持して、片貝
海岸に無料休憩所を開設するこ
とを決め、明治43（1910）
年7月23日、真夏の太陽が照り
つけるなか、およそ50人の来賓
や関係者を集め、盛大に開設式
が行われました。

無料休憩所の開設期間は、7
月23日から9月20日。六角形の
茅葺葦子張りのあずまやで、テ
ーブルや椅子を配し、麦湯を提
供し、衣類や所持品などの保管
のサービスをしました。

また、非常時に備え、泳ぎが
達者な番人を配置させていたと
いうことです。

これは、現在も続いている「海
開き」の原形であると考えられ
ます。この地には、海と歩んで
きた一世の息吹が今なお、息
づいています。

PR活動

観光パンフレット発行

地域の観光パ
ンフレットの原
点がここにあり
ます。

明治44（19
11）年7月、九
十九里浜に、も
っと多くの海水
浴客を呼ぼうと、
月華は観光パン
フレット「九十九里 其の一」
を編集し、当時としては異
例の3,000部を東京方
面に向けて発行し好評を得
ます。

翌年の明治45（1912）
年には、掲載内容をさらに
グレードアップさせた「九
十九里 其の二」を発行し
ています。

そこには、月華の写真撮
影の腕を生かした九十九里
が凝縮されている写真や文
芸の趣味を生かした俳句、
文筆家の文章などが掲載さ
れています。



4

月29日。毎年、この日に行われるのが、本州で一番早い海開きです。

夏季だけではなく、四季を通して観光を図るため、約20年前から行われています。

式典には、たくさんの方の来賓や来賓客が集まります。海、安全祈願の神事や伝統芸能の披露、豪華な景品が当たる宝探しなど、さまざまなイベントが行われ浜は盛り上がりを見せます。

これを機に本格的な観光シーズンの幕開けとなり、九十九里浜は、にぎやかさを増し、行楽シーズンを待ちかねた人の明るい笑顔と活気に包まれていきます。

現在をさかのぼること100年前。この原形である片貝海水浴場無料休憩所の開設が、この地域の「海水浴文化」の出発点でした。来賓客のために蓄音器での余興や記念撮影、麦湯のサービス、新聞縦覧所の設置など、当時としては格別であろうイベントが行われ、海水浴に訪れた人たちを大変喜ばせたそうです。

昔から半農半漁の町であるこの地域には、新鮮な農産物や海産物などの食材がとても豊富でした。四季それぞれの味覚が、多くの人の足を運ばせた一因というところもあるのではないでしょう。

変わり、レジャーは多様化してきています。

昭和36（1961）年には、空前の海水浴全盛のレジャーブームが押し寄せ、片貝海岸をはじめとする町内にある海水浴場は人であふれました。

また、多様化は海水浴のほか、マリンスポーツや体験学習、海洋性レクリエーション、健康増進、憩いの場など、海の余暇に求められるものを大きく変化させています。これからは、より一層の時代のニーズに合った観光が求められています。

多様化を「どう受け止め」「どのように向き合うのか」わたしたちに課せられた宿題です。

九十九里浜は、きらめく魅力と秘めた地域活性化の可能性を多く残しています。

雄大な太平洋という観光資源は、無限であり、潜在する資源を十分に発揮することで、時代の余暇にあったさまざまなニーズに対応することができます。

時代がどんなに移り変わっても変わらないものが、この浜にはあります。

ここに「海水浴文化」の種をまいた、月華は地域振興と自分の夢を実現するため、幾多の障害と苦難を乗り越えて、大きな足跡を残しました。挑戦しようとする意思が強ければ、進む歩

うか。

地域に住む、多くの人が世話好きで、好奇心旺盛、社交的でもあり、その風土が多くの人を引き付ける引力になったのかも知れません。

だからこそ、先人はこの「もてなしの心」で、多くの文化人を迎え入れてきました。

その結果、この地を訪れた文化人は、幾多の傑作や知識、技術を惜しげもなく披露し、伝達させ、残したと言っても過言ではありません。

「もてなしの心」は、相手の立場になって心温まる対応を心掛けること。観光に限らず、地域社会における豊かな人間関係を築く源にもなります。「もてなしの心」は、地域の人、訪れる人、すべてを結び付けて、この地域に愛情・愛着を感じさせ郷土に誇りと自信を持たせてくれます。

余暇を楽しむ。近年の九十九里の歴史は、観光の歴史です。夏のにぎわいは、九十九里の風物詩であり続けると思われます。現在も昔も、これから先の未来も、きっと変わらないことでしょう。

しかし、昨今の経済情勢やライフスタイルの変化、高度情報化時代の到来などの影響により、人々の余暇の過ごし方は大きく

幅も大きくなり、逆境を糧にどんな壁でも乗り越えられるという可能性をみせてくれました。

「100年の道しるべ」です。

当たり前に思えてしまうからこそ、もう一度見つめ直してみたい。大切なものを。いつもの尺度ではなく、違う尺度で感じてみたい。

それは、美しく果てしなく広がる白砂。澄み切った空の青と雄大な黒潮の香り高い海の青が水平線に接する美しい自然。ふるさとの唯一無二の誇りと自信です。

何よりも昔から、人と人とのつながりを大切にする絆があり「もてなしの心」があります。

そして、肩の荷を降ろしたくなるような、多くの人が求める安らぎの「癒しの空間」がここにはあります。

わたしたちは、この地域で文化と一緒に生きてきました。「文化は人から人にしか伝わらない」。これを継承することが、今を生きて、わたしたちに課せられた使命であり、町の未来を照らすものであります。

これからの100年に向けて、一人ひとりが新たな「海水浴文化」を創造していくことを忘れずに、地域の魅力向上のため、九十九里の魅力を発信して行く。明るい未来のために：

100年の道しるべ

この地には100年の伝統があります

「守りたいもの」「育みたいもの」

培われた地域の文化が息づいています

これを継承し、次の100年に向けて

歴史のページを彩るのはわたしたちなのです



文学歴史

歴史とロマンの香りが漂う
たくさんの文化人に愛されてきた郷土
浜に咲いた文化に触れ思いをはせる

蘆花文学碑

徳富蘆花は、明治元(1868)年に熊本県水俣で生まれました。大正6(1917)年の夏のひと月を九十九里町粟生の中西月華の別荘(茉莉舎)で過ごします。九十九里浜の暮らしを忠実に繊細な筆で綴り、翌年4月「新春」の中でここでの避暑生活をこと細かく記した作品「九十九里」と題して発表しました。これがきっかけとなり、海水浴場としての名を広げます。中西月華と徳富蘆花の交流は、その後も続きました。二人の共通点は、九十九里の海を愛していたということではないでしょうか。



宵待草詩碑

竹久夢二は、明治17(1884)年に岡山県邑久郡本庄村(現:瀬戸内市)の古い造り酒屋に生まれました。後に画業に専念し、女性の哀しさと美しさを繊細な筆に託した美人画は大正ロマンを漂わせます。明治40(1907)年に新聞に掲載された竹久夢二の紀行文「涼しき土地」に月見草が咲く作田川の川辺の情景が描写されています。この「宵待草」の詩碑の書は友人の白鳥省吾が書き、碑陰は今井福治郎の筆です。「待てど暮らせど来ぬ人を宵待草のやるせなさ今宵は月も出ぬそうな」と歌われています。



伊能忠敬記念公園

伊能忠敬は、延享2(1745)年上総国山辺郡小関村(現:九十九里町小関)の小関五郎左衛門家に生まれました。父は小関家の婿養子に迎えられましたが、武射郡小堤村(現:横芝光町)の実家に姉を連れて復籍しました。宝暦12(1762)年に18歳で佐原村(現:香取市)伊能家の婿養子となりました。家督を長男に譲り、江戸に出て暦学や数学、測地法を学び、約20年かけて日本全国の沿岸測量を徒歩で行いました。わが国最初の実測地図「大日本沿海輿地全図」の作成なかば、文政元(1818)年に亡くなりました。



智恵子抄詩碑

これは高村光太郎「千鳥と遊ぶ智恵子」昭和12(1937)年の詩碑で、書は光太郎のペン書きを拡大したものです。高村光太郎は、明治16(1883)年に木彫界の重鎮で上野美術学校の教授であった高村光雲の長男として生まれました。大正3(1914)年に智恵子と結婚しますが、昭和13(1938)年に死別します。絶唱「智恵子抄」は、真亀海岸の果てしなく続く、砂丘をこよなく愛した智恵子への無限の愛を綴った美しくも悲しい詩集です。碑陰は光太郎生前の親友であった草野心平の筆です。



海

耳を澄ませば聞こえる潮騒
ふるさとの原風景がここにはあります
雄大な大自然は天からの贈り物

海水浴場

九十九里町は、黒潮踊る太平洋に面し、なだらかな弧が約60[㏎]続く九十九里浜のほぼ中央に位置しており、首都圏から約60[㏎]圏内にある町です。古くから海水浴場として県内外に名をはせ、美しい海岸線や波光きらめく水平線、開放感あふれる全国屈指の海岸は、どこよりも遠浅で広く、明るく、きれいで三拍子そろったマリネジャーの宝庫です。サーフィンなどのマリンスポーツをはじめ、シーズンを問わず、ハマヒルガオやハマナシなどの豊かな自然を楽しみにたくさんの人が訪れます。また、休日ともなれば、海釣りに来る太公望でにぎわいをみせ、片貝漁港から出漁する釣船も、ハナダイ、ヒラメ、アジなどを目当ての釣り人でいっぱいです。



イワシの町

17世紀半ばの江戸時代から「イワシ漁」とともに栄えてきました。イワシをはじめとする、水産加工業は町の産業を支える大きな柱です。そして、昔から引き継がれてきたイワシ料理として、ゴマ漬けやミリン干しがあります。お土産品としても人気が高い一品です。また新鮮な海の幸や地元ならではの、イワシ料理や焼きハマグリが食べられるお店が多いのも自慢です。



ふるさとの魅力再発見

ここにある宝物

お問い合わせ
町企画財政課 ☎70-3121
町産業振興課 ☎70-3177
町教育委員会 ☎70-3193

九十九里新創世記



片貝海水浴場無料休憩所100周年記念誌

発行日 平成22年8月

発行 九十九里町

〒283-0195

千葉県山武郡九十九里町片貝4099番地

TEL 0475-70-3122

<http://www.town.kujukuri.chiba.jp/>

協力 企画展「海のたのしみ海のもてなし」実行委員会